道路の先の家

結城ひいる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
道路の先の家

【Ｎコード】
Ｎ１３３９Ｒ

【作者名】
結城ひいる

【あらすじ】
僕はずっと彼女の人形だった。
彼女は僕のことをこれからどうするつもりだろう。

家の前には橋がある。橋の上には自動車がたくさん通っている。お母さんはあの橋が嫌いだ。車が怖いという。あの橋は利根川に架かっている。

利根川は大きな川だ。私は利根川の近くで育った。利根川の土手は、私と、千尋くんの遊び場だった。
私と同い年の千尋くんは、小さなころは私よりも背が低く泣き虫だった。そんな千尋くんを私は弟のように思っていた。千尋くんは私のスカートのすそを握って離さなかった。

千尋くんは女の子みたいに可愛くて、私のおままごとに付き合わせても嫌がらなかった。私のお下がりのオーバーオールのワンピースを着せ、人形用の付け毛をつけると、女の子のようだった。千尋くんの声は小さくて、その姿で遊んでいると、みんな千尋くんを女の子だと思った。

小学生になっても千尋くんは女の子の格好をよくした、私の服や、デザイナーである千尋くんのお母さんに作ってもらったワンピースを着て、お母さんのクローゼットから、こっそり借りたウィッグを被って、おしゃれな女の子になりきっていた。そのころには私と千尋くんの身長は同じくらいになっていたから、私も千尋くんの服をよく借りた。彼の服はお母さんの趣味が反映されていて、シックでいて、少年的で何より美しかった。私は千尋くんの服を借りて、男の子の格好をするようになった。まだ、胸もなかった私には千尋くんの服がよく似合った。切れ長の目は、男の子っぽさと冷たさを持っていて、その容姿は少女というより、美少年だった。

千尋くんが女の子の格好をし、私が男の子の格好をして遊ぶようになると、周りの視線が変わった。周囲の女の目は私を追い、男の目は千尋くんを追った。たまに男でも私をジロジロみたり、女の子も熱っぽい視線を千尋くんに送ったりしたが、私も千尋くんもあまり気にしていなかった。

中学にあがってから、私と千尋くんの格好はさらにより女っぽく男っぽくなっていった。千尋くんは朝から私にメイクを施され、メタモルフォーゼのお洋服とピンクの髪のウィッグを身に付け、美しいロリータ嬢になり、私はアリスアンドパーレーツのお洋服に身を包み美しい少年を装った。その姿で原宿に出かけるのが、そのころ一番の楽しみだった。二人並んで歩くと、写真を求められたり、雑誌のスカウトから呼び止められたりした。自分たちが求められ、そしてわずかに賞賛されるのが、うれしかった。でも、私も千尋くんもわかっていた。私の胸は膨らみ始め、千尋くんは体格ががっしりしてきていることが。この淡い美しい日々がもう長く続かないことが。

高校生になり、私たちは取り決めをした。千尋くんの身長が私を超えたら、もう終わりにしようと。たしかに、女の子の男装や、男の子のロリータ嬢も存在するが、私と千尋くんの求めるものはそこになかった。ロリータ嬢と少年に見えてこその性の逆転、それに意味があった。そして高校2年の秋、私の背を千尋くんが越した。「もう終わりだね。」お互いにそういった。

でも、私たちが離れることはなかった。男の子と女の子として私たちは遊んだ。性別に逆らわず遊ぶことは、とても楽で、ドキドキした。二人でディズニー、カラオケ、原宿も歩いた。雑誌に呼び止められるは無くとも、私は男性から振り向かれ、千尋くんは女性から視線を浴びた。

卒業式が間近にせまり、学校も無くなった二月。私は千尋くんから告白された。「男として一緒にいたい」そういわれた。彼の体格はずいぶんがっしりして、少年のときの美しさを残しつつも、その全身は男のものだった。私はすぐ返事ができなかった。今までの関係が遊びだったことに気が付いた。そして、自分が女になり、千尋くんが男になったことを、見てみぬフリをしてきたことに気が付いた。お互いが邪魔せずに高めあう存在である、私と千尋くん。でも今の二人を客観的に鏡に映したときその姿は、彼氏と彼女、とるに足らぬ、世の中に溢れかえる存在。もう、特別なフリはできない。汚く、幸せになってしまう。崇高さ、ある種の美しさを捨て男女になる。それが苦しい。

それから、一ヶ月がたった。私は返事を考えるという理由で、千尋くんと会っていない。彼が誘ってきてくれても、煮え切らなかった。カップル、男女、ありふれた存在になってしまう。物語の中でプラトニックに特別でいた私と千尋くんが、現実の一部となってしまう。それが怖かった。そういえば、明日が卒業式だ。

式は単調なものだった。泣いている子もいた。先生はなにか悲しそうだった。それだけだ。私は千尋くんの姿を探した。しかし見つからない。一度教室に戻ろうと下駄箱までいった。うわばきを取り出すと、一枚の紙が一緒に落ちてきた。

屋上にて待つ　　千尋

その文字を読み終えると、私の足は走り始めた、階段を二段飛ばしで駆け上がっていく。四回で息が切れて、そこからは普通に歩いた。屋上は5階。引き戸を開けると冷たい空気が私を迎えた。
千尋くんは私を見据えて立っていた。足には、赤いパンプス。足に

はふりふりのついたピンク色のソックスそして、どこのブランドか知れないようなロリータ服を着ていた。メイクはせず、しかしウィッグは被っていた。千尋くんと私の目が合う。千尋くんが苦悶の表情を浮かべる。

「僕はもう、お人形ではいられない。××ちゃんが、僕にお下がりをくれたときから僕はずっと××ちゃんと一緒にいた。××ちゃんが僕に服を選んでくれるのはうれしかった。いつもぼくと一緒にいてくれて、幸せだった。でも僕は君の弟のような人形だった。僕がずっと少女のままでいられるならそれでよかった、××ちゃんが遊んでくれるなら。でももう僕は大人になる。××ちゃんが大人の僕が嫌なら、それでもいい、僕を人形扱いしていい。だから、そばにいてほしい。」

千尋は一気に静かに語った。千尋くんの気持ちはよくわかっていた。自分に美しいという自身は無くとも、千尋くんに愛されているのはよく知っていた。彼は私にずっと恋をしているのだろう。私にとって千尋くんは？

まだわからなかった。だから「コイトスしない？」といった。千尋くんは一瞬何のことかわからなかったようだが、すぐに顔を赤らめ、はっきりと答えを出さない私を軽くにらんだ。

千尋くんが着替えるのを待ってから、私の家に二人で帰り、まず千尋くんの服を脱がせた。制服を脱がせ、下着も脱がせた。千尋くんは私の服を脱がせた。それから、単調なコイトスをした。そうして私は千尋くんが男であることがようやくわかった。

僕の家の前には道路がある。それをはさんだ向かいの家に、僕の愛

しい人が住んでいる。

（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。
貴方の感想が聞きたいです。
コメントしてくれますか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1339r/

道路の先の家

2011年10月5日13時45分発行